

ユニコーンとともに

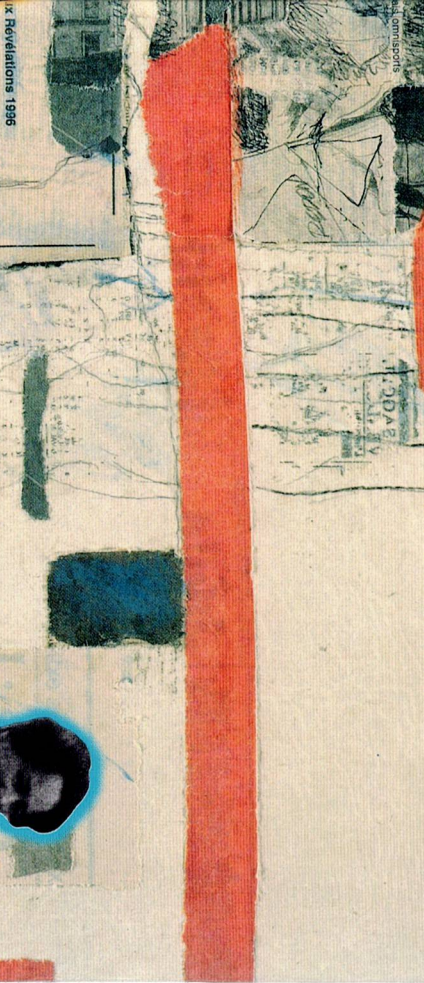
輝く時、失意の時

1929~1932

アン・モロウ・リンボバーグの日記と手紙

universe

アン・モロウ・リンボバーグ
『翻訳』中川 経子



ix Revelations 1936

"... Dieu m'a donné la foi "

M6 et diffusé plus de 140 fois sur M6

"... Respect ... Simple et Funky " et

l'oise "

par M6 et diffusés plus de 500 fois

is parantés par M6

maises : " Dornir d'éclos "

ar M6 et diffusés plus de 250 fois sur

arrangés par M6

" Twenty two bar "

ar M6 et diffusés plus de 130 fois sur

arrangés par M6

" il baigne " et " Quelle aventure "

de 330 fois sur M6 "Concerts

16

" Lulu " et " Cour des Grandes "

musique de demain en 1994. Cible

M6 et diffusés plus de 200 fois sur M6

16

" Lulu " et " Cour des Grandes "

musique de demain en 1994. Cible

M6 et diffusés plus de 200 fois sur M6

16

" Lulu " et " Cour des Grandes "

musique de demain en 1994. Cible

M6 et diffusés plus de 200 fois sur M6

16

" Lulu " et " Cour des Grandes "

musique de demain en 1994. Cible

M6 et diffusés plus de 200 fois sur M6

16

" Lulu " et " Cour des Grandes "

musique de demain en 1994. Cible

M6 et diffusés plus de 200 fois sur M6

16

" Lulu " et " Cour des Grandes "

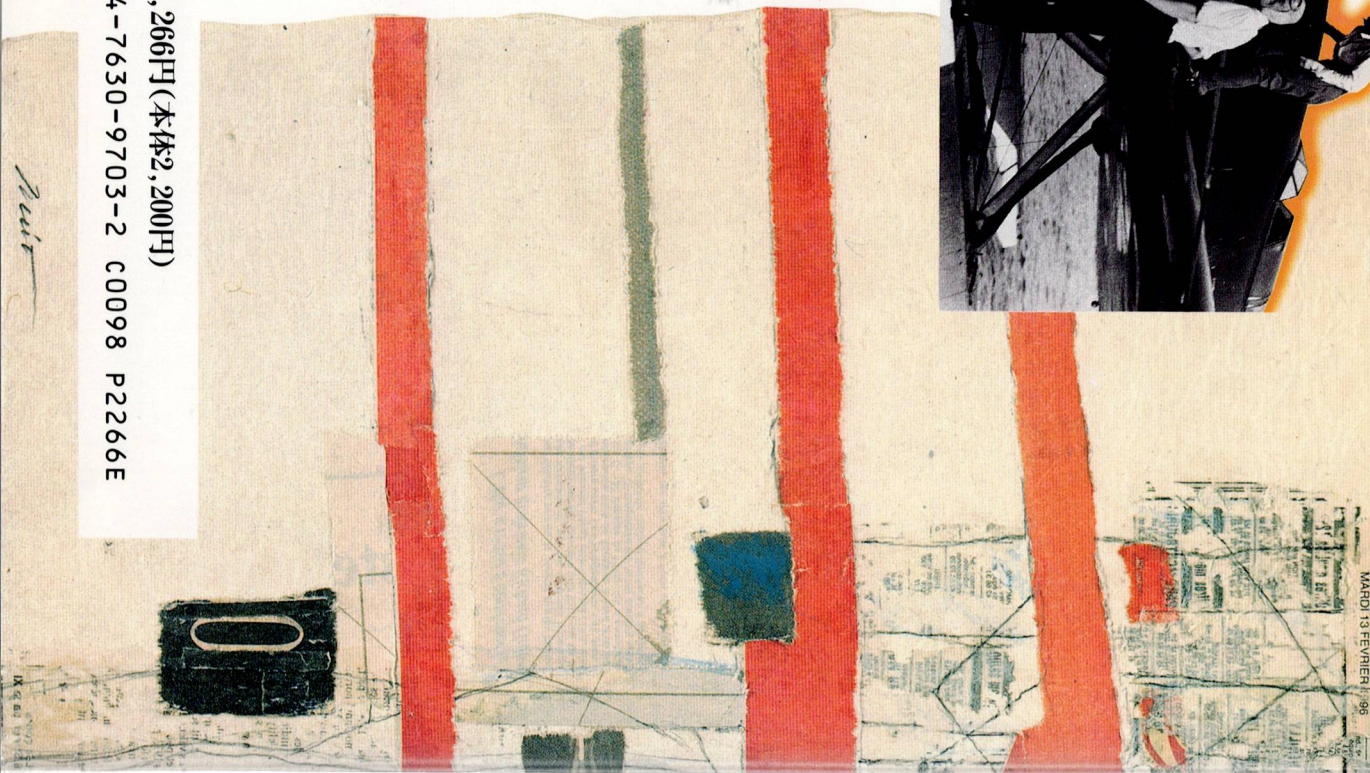
musique de demain en 1994. Cible

M6 et diffusés plus de 200 fois sur M6

16



Hour of
Mardi 13 FEVRIER 1965



定価2,266円(本体2,200円)

ISBN4-7630-9703-2 C0098 P2266E

Hour

IX 4 63 274

Hour of Gold, Hour of Lead

Anne Morrow
LINDBERGH

ユニコーンとともに

輝く時、失意の時

1929～1932 アン・モロウ・リンドバーグの日記と手紙



アン・モロウ・リンドバーグ

〔翻訳〕中川 経子

●
発行 美術の図書 三好企画

発売 (株)求龍堂

tokyo

刊行にあたって

この本の日記と手紙は、重複した部分と読みやすくするために削除した部分がありますが、書き直しはしてありません。綴りを訂正し、句読点は標準化しました。これは、歴史的な記録というよりも、むしろ個人的な記録なので、脚注は原則として、なるべく簡潔にして本文の近くに置き、本文を理解する上で重要なものに限りました。

翻訳にあたって

訳注は*または〔 〕を付して、原注は（ ）を付して各頁の下段に示しました。

Hour of Gold, Hour of Lead *Anne Morrow Lindbergh*

Copyright ©1973 by *Anne Morrow Lindbergh*. All rights reserved.
Japanese translation rights arranged with Harcourt Brace &
Company in New York through The Asano Agency, Inc. in Tokyo.
Published by MIYOSHI Art Publishing Company in Tokyo.

〔扉図版〕 チャールズ・リンドバーグ・ジュニアを抱くアン

誰のためのものだろうか？

心の中に閉じこめられた愛は

そこにとり残されたまま

・ ・ ・ ・ ・

心だけでは収穫はない

永遠に

愛の種を

繰り返し蒔かなければ

目次

輝く時 *Hour of Gold*

序 章 その1 ————— 8

1929年 23歳 ————— 21

1930年 24歳 ————— 163

1931年 25歳 ————— 209

失意の時 *Hour of Lead*

序 章 その2 ————— 294

1932年 26歳 ————— 303

日本を愛する母に代わって ——— リーヴ・リンドバーグ 447

親愛なるアンへ ————— [訳者] 中川 経子 449

アン・モロウ・リンドバーグ 覚え書き ——— 三好企画・編 452



佐野 めい
不定形のキャナリーノート
油彩・画布

輝く時

Hour of Gold

左からチャールズ・リンドバーグ、アン、姉エリザベス、母、妹コンスタンス、
弟ドゥワイト。

主な登場人物

アン・モロウ・リンドバーグ(主人公・著者)
チャールズ・オーガスタス・リンドバーグ(夫)
ドゥワイト・ホイットニー・モロウ(父)
エリザベス・カッター・モロウ(母、ドゥワイト・モロウ夫人)
エリザベス・リーヴ・モロウ(姉)
ドゥワイト・ホイットニー・モロウ・ジュニア(弟)
コンスタンス・カッター・モロウ(妹)
エイミーおば様(エイミー・オールドリッチ、母の友人)
ミセス・リンドバーグ(チャールズの母)
チャールズ・リンドバーグ・ジュニア(息子)



序 章 その1

私の人生の転機

伝記や自叙伝の中には、若者がその育った環境から巣立つ人生の転機が必ず描かれています。幼い頃には自分を保護してくれたけれども、やがては自分の成長を拘束するように思えてしまう家庭や両親という〈殻〉から、思春期にいる人はどのように自分を解放するのでしょうか？ 一体どんな方法で、家族との絆を解くのでしょうか？ そして、自己発見の扉をどうやって選り、開くことになるのでしょうか？

人は、自分を自由にする偶然の出来事や希望や力とは、一体どういうものなのかを知りたいものです。もちろん、誰かに深く恋をすることは、自分を解放する大きな力であり、若い人達を自由にするごく普通の経験です。愛されている人は、〈解放者〉であり、理想的なのは、恋人同士がお互いを、新しい世界へと解放することです。私も、その例外ではありませんでした。カレに愛されているという紛れもない事実は、すぐにも信じ難く、それは私の世界を変えてしまいました。

私は恋する人から〈自信と強さ〉を与えられ、性格も随分変わったのです。私が結婚することにした人は、私と私の能力を信頼してくれました。その結果私は、自分には思っていたより以上のことが出来ることを発見しました。魅せられてはいたものの、とても到達は出来ないと思いこんでいた、あの不可思議な、遠く離れた〈空の上の世界〉にいても、自分が思っている以上のことが出来るのだということを知ったのです。

夫は“現実の生活”への扉を開き、私はそれに恐れを感じましたが、同時にその“現実の生活”は、私を手招いていました。私は、扉のむ

こうへ行かなければならなかったのです。

〈ロマンス〉は、私にとって決定的な要素ではありませんでした。私達の求婚期間を取り巻いていた、華やかにきらめく霞は、私の気持ちを曇らせてただけでした。私は、ロマンスというものを信用していませんでした。私達の婚約を、世間はロマンスと見て喝采したのですが、大抵の花嫁とは違って、「おめでとう」という祝詞の嵐を受けたのは私の方で、カレではありませんでした。花嫁が〈時代の英雄〉を捕まえたといふのです。メキシコのアメリカ大使館*1の陽気な人達が歌ったように。

♪彼女はただの大使の令嬢。だけど、彼は空のプリンスさ♪

私は、夫となる人を〈プリンス〉とは見ていませんでしたが、言葉にこそしなかったものの、カレは輝く鎧兜を着けた騎士で、私はその騎士を熱愛する家来に近いイメージではありましたし、こういう役割は、生まれつき私の役でもあったのです。何年もの間、私は姉に憧れる〈臨時代役〉でしたし、学芸会の劇でもよく家来の役を与えられました。私が小柄で演技力がなかったのも、そういう役に選ばれたのです。（「誰かある。酌を取れい！」「はち、陛下。只今参上つかまつります！」）

従の立場は、結婚生活のための良い基礎だったのでしょうか？ いいえ、そうではありません。しかし、人間関係を学ぶ、大事な一歩だったのでしょうし、これが大人になるまで、自分に演じられる役割だったのです。世間のことを少ししか知らないくせに、でも、探検したくてたまらなかった青春時代、私は経験豊かな誰かの見習いにすぎなかったのですが、そこで、私はお手本を習い、自分でやってみて、身につけていったのです。後に、自分自身の強さに気がつくまでは、他の人の強さに頼っていましたが、それは悪い出だしではありませんでした。

*1 アンとチャールズ・リンドバーグは、アンの父親のメキシコ大使としての赴任先、メキシコシティのアメリカ大使館で初めて出逢った。

自由と制約

しかし、自分を解放する扉は他にもありました。飛行は明瞭に実感出来る〈自由〉でした。あの時代には、空を飛ぶことは美であり、冒険であり、発見であり、新しい世界への窓口でした。地上のみで行動し、視野も狭かった私に、空から見下ろす限りなく広々とした視界が与えられ、読書と文筆と内省という世界から、行動の世界へ解き放たれました。

飛行のための実際的な訓練作業や、無線操縦士や飛行家としての仕事、それに、搭乗員の一人として自分のパラシュートを運んだり、自分自身の“任務”を遂行することは、私に大きな自信を与えてくれました。このお蔭で、私は初めて、生活と行動の伴う“本物の世界”での価値観を持つことが出来ました。巣立ちを始めた雛鳥のように、私は懸命にはばたき、自分が飛べることに驚き、新しい世界へ解放されました。

けれども、人が想像するような〈完全な自由〉というものは、決して存在しないのです。大抵の場合、今あるひとつの制約を別の制約と取り替えているだけなのです。取り替えて得た制約は自分で選んだものであり、すんなりと受け入れられるものです。

私が直面した最初の制約は、世間の目にさらされていたことです。無名であり、庇護された家庭生活の中で、親密でこじんまりとしたコミュニケーションをとっていた世間知らずの私が、突然、楽屋から光り輝く表舞台に引っ張り出されたのでした。

私達は恋愛期間の最初の頃でさえ、プライバシーというものはありませんでした。私達の生活は無情にも世間にさらされていましたので、私がカレと本当に結婚したいかどうかを確かめるために、この人を十分に知ることは、ほとんど不可能だったのです。この異常さが、婚約期間中に私が抱いていた疑問を物語っています。二人きりになろうとしてど

んなに苦勞したか、信じ難いほどですし、思い出すことさえ大変です。人目につく立場にいた他の人達も、同じ苦勞をして、もっとひどい目にあってきましたが、私にとっては、これは新しい試練でした。

メキシコシティでは、記者たちが、大使館の門の外で私達を待っており、車も、カメラも、私達を追いかけるために準備してありました。同じメキシコのクエルナヴァカにあった両親の週末用の別荘では、大胆なカメラマン達が、庭にいる私達の写真を撮るために、近所の家の屋根や展望塔に上りました。私達は変装して裏口からひそかに抜け出し、友達の家に寄ってから車を乗り換え、人が住まないような地域へ逃げましたが、その頃、そんなことをすれば、山賊に襲われる危険がありました。

私達は飛行にも出かけました。この場合には、少なくとも、マスコミに追いかけることはありませんでした。カメラの一斉射撃の中をはいくぐって、群衆を後に飛行場を飛び立ち、それからやっと、ピクニックをするために平地に着陸して、ようやく二人きりになれたのです。

しかし、〈完全な孤立〉というのも、正常な生活ではありません。犯罪者や不倫関係にある愛人達のように、二人一緒のところを見られないように気をつけていましたし、街を歩いたり、買い物をしたり、観光をしたり、レストランで食事をしたり、世間の行事に参加したりするといった、日常的な楽しみは捨てなければなりませんでした。

メキシコのアメリカ大使館や、ニュージャージー州エングルウッドの両親の家での、社交上の行事でさえも邪魔が入りました。使用人達は賄賂をつかまされ、手紙は盗まれ、電報はしばしば漏洩し、記者達は何も事情を知らない客や友人達に話しかけ、私達の私生活についてのゆがんだ記事を書いたり、話の種がなくなると、話をでっちあげるのでした。

一番きつい制約は、私の最愛の夫となる人からの警告でした。

「屋根の天辺から、大声で叫ばれたくないと思うようなことは、絶対に言わないこと。新聞の一面に出たら、イヤだと思うようなことは、決して書かないこと。」

この命令の結果、私は息が詰まってしまいました。自然に表現することに対して、用心のための蓋がビシヤリとかぶせられました。私は私生活を侵すものから、自分で夫と自分自身を守らなければならないのだと確信していましたが、それにしても、〈正直に話したり、書いたり、絶対にしないこと〉とは、なんと大きな犠牲を払うことなのでしょう！

文章に表わしたり、人との会話の中で話題として話し合わない限りは、自分の経験は完成されないと考えている、この私が……。

大学生の時、人生で最高にエキサイティングなことは、コミュニケーションをとることであると言った、この私が……。

もちろん、結婚後は、私は自由に夫と話すことが出来ましたが、それは飛行機の中や荒野であったり、寝室の中で、まわりに人がいない時だけでした。そして、ホテルの部屋の中でさえも、立ち聞きされないように、窓や、廊下が続くドアの上の明り窓が閉まっていることを、確認しなければなりません。それに、愛情と同じく、コミュニケーションは「望むところに広がる」のであり、一人の人間、同じ場所、一定の時間に限ってしまうことは、野性の鳥に紐をつけて「飛べ」と言っているようなものです。その結果、私のような人間の精神は萎えてしまうのです。私は3年間、まったく日記を書くことをやめましたし、手紙でさえも盗まれたり、覗き見されたりするので、慎重に書いたり、家族にだけ通じる言葉や冗談を混じえて書くようにしました。

結婚とプライバシー

私達の結婚式は1929年5月27日に、エングルウッドの私の実家で行われたのですが、秘密にされていました。私のウェディングドレスは、近所のお針子に仕立ててもらい、花嫁のブーケは、姉のエリザベスが庭から摘んだ花で作ったものでした。出席した数人の友達や親類の人達も、当日の朝まで知らされませんでしたし、写真も撮りませんでした。

新婚夫婦は、借りた車で逃げ出したのですが、門のところに群がっている記者達を通過する間、車の床に寝ていたような気がします。友達の家で車を乗り換え、ロングアイランドまでドライブし、海岸近くに投錨してあったキャビン付きのモーターボートまで小船を漕いで行き、夜になってロングアイランド海峡にそっと出て行き、それから、海岸沿いにメイン州に向かったのです。

2日後、ブロック島で給油している間に、私達のことがわかってしまい、その後の新婚旅行の間、船や飛行機に乗った記者やカメラマンに追いかけられました。無甲板船に乗った一人の男は、デッキに出てきて写真を撮らせろと要求しながら、7時間もぶっ続けに、私達のボートの周りをグルグルと回り、その航跡でこちらはずっと、揺れていました。

ついに私達は、錨を後ろに引きずりながら、外洋に向かいました。陸地も見えなくなった漁礁で過ごした夜のことを、憶えています。ボートが波に激しく揺さぶられる中、船倉のあちこちで缶詰の缶がころがったり、瀬戸物の食器が壊れたりしました。

この泥棒とお巡りさんのごとき追跡ごっこは、私にとっては全く思いもよらないことでしたが、これは、知名度とはつきもので、世間に名の知れた人達にとっては当然のことになってきました。その時私は、まるで逃亡した囚人のような気がしていました。これは〈自由〉どころではありませんでした。

私達が“普通の生活”——夫の仕事は、アメリカ大陸横断や大陸間の航空路を探索し、整備することでした——に戻った時には、この状況は以前よりはマシにはなりました。それでも、私達にはプライベートな生活おとぎというものがなく、あるのは〈公の生活だけ〉でした。旅客航空路線の開始は、一般の人達にとっては、大きな関心事であるということは、私達にもよくわかりました。二人は、どこへ行くのも一緒でした。写真撮影のためにポーズをとり、夫は記者達のインタビューに応えました。

その頃の私達には家がなく、ホテルや飛行機の中や、他人の家で過ごしていたのです。新しいトランスコンチネンタル航空のニューヨークーロサンゼルス間の旅客航空路を準備するために、アメリカ大陸を何回も横断飛行したり、パン・アメリカン航空の中南米航空路の就航を手伝ったりと、私達は常に旅をしていました。ハーヴィ・ハウスや、個人の家や、大使館や公使館に滞在しながら、家庭を開放して下さった友人や見知らぬ方達のことを、私は本当にありがたく思いました。電話がたくさんかかってきたり、招待を受けたり、報道関係からのプレッシャーがあったり、さらには好奇心に満ちた見物人がやって来たり、というような迷惑を、私達はその家庭の中に持ち込んだのですから……。

私の日記と手紙から、ニューヨークのグッゲンハイムご夫妻、セントルイスのピクスビーご夫妻、ナイトご夫妻、ロバートソンご夫妻、サンフランシスコのイーストランドご夫妻、ロサンゼルスのマダックスご夫妻、そしてカリブ諸島、北極地方から東洋をめぐる旅の途中で世話になった、数え切れないほどの方達の寛大な厚意を読み取ることが出来ます。これらの方達は、私達を泊めて安心感を与えて下さり、プライベートのある貴重な生活もさせて下さいました。

本当の生活を強く渴望していた私が、伝統的な教育、親密な家族の輪、

学問を学び世間とは交渉のない生活という〈制約〉と、名声、評判、絶え間のない旅という〈制約〉を、ただ引き換えにただけであったことに気がつくには、それほどの月日は要しませんでした。

名声は不滅であるという一般的な仮定に反して、「名声はいわば死よ」と、大学時代の友人が何年も後に私に言ったものです。名声は、世間の注目を浴びている人間の周りの生活を拘束することになるので、それは〈死〉のようなものののです。もし、どこにいても世間にわかってしまうとしたら、メドゥーサ*2のような気持ちになり始めるものです。フラストレーションが爆発して、私が母に書いたように「私達は人々や生活を、何気なく捉えることは決して出来ません。いつでも私達は見られているのです。」

といっても、私は不幸だったわけではありません。私達が幸せだったことを、手紙は明確に物語っています。私は深く夫を愛していました、それに（手紙を引用すると）「あらゆるものに、一種のまばゆい金のような“輝き”が」ありました。二人だけで飛び立つ時に、「チャールズと私だけが、そう感じるのかもしれませんが、すべてが最高の輝きを……」持って、輝いていました。

飛行に夢中の結婚生活

私は、飛行機で飛ぶことが大好きでした。それは、自由であり、美であり、群衆からの逃避でした。また、プライベートでもありました。昔の開放座席の飛行機は、話をするには騒音がひどすぎましたが、メモをやりとりすることが出来ました。また、飛行することで、一人になる時間を持つことが出来、自分自身の思いにふけったり、詩を考えたり、学んだりする静けさを得ました。（あの頃は、雑誌やスナック菓子やクッションを持って来て、邪魔したりする搭乗員はいなかったのです。）

*2 ギリシャ神話に登場し、蛇の頭髪をもち、これを見るものを石に変える。

旅と行動の生活に投げ込まれましたが、私はそれに活気づけられました。大陸横断を何回もし、小さな飛行場に寄り、地方の人達に会うことによって、私はアメリカの広さと美しさを、そして、ニューイングランドでの私の青春時代には会ったことのない人々の暖かさと活力を、あらためて認識しました。意外なことに——というのは、私は内気な女の子だったので——人に会うことが楽しかったのです。夫の友達である場合が多かったのですが、パイロットやその妻達、飛行場の航空関係の職員達、その他、私達が飛行機に乗せて飛んだり、旅行中の会合や行事で会った見知らぬ人達とでさえ楽しく話せ、大使館の社交的な会合で会話をするよりも、はるかに楽だということがわかりました。既婚女性として、夫が私の傍にいてくれ、新たな自信も湧きました。

「彼が私の後ろにいてくれると、いつもまっすぐに背筋を伸ばして立とういう気になります。」



しかし、私はこれらの新しい体験や、新しく知り合いになった人々のことを、実家の家族に何でもない世間話のように伝えたくてしかたがありませんでした。手紙には書きましたが、新婚の頃の手紙は幾分抑えぎみで、不自然なのです。私は軽率なことを書くのを恐れていました。以前と同じように、「家族のみんなに会って、直に話せたら良いのに」と、どんなに思ったことでしょう。

今から思えば、私の実家の家族へのホームシック状態は、若妻として信じられないほど浅はかなことで、若い夫にとってはむしろ大変なことだったと思います。手紙にも書いてありますが、自分が結婚しているということを、自分でもなかなか信じられなかったのです。新しい生活に満足していましたが、実家の家族がひどく恋しかったのです。結婚して最初の1年間にこういう状態になるのは、よくあることなのでしょうか？

また、姉妹達と噂話をしたり、感想を述べ合ったりする〈自由〉が欲しいと思うことは、私だけの特別の問題だったのでしょうか？

一年間の行ったり来たりの生活、いつも旅をして、他人を警戒して、個人的な質問を受けることを避け、慎重に平凡なことだけを語る生活の後で、私は個人の自由な生活と家と普通の家庭が、欲しくてたまりませんでした。よその人には皆、家があり、家庭生活があり、プライバシーがあり、赤ちゃんがいるのに……と、私はうらやましく思いました。

1929年の冬には、最初の子供が生まれるのを待っていたのですが、普通の生活とはほど遠く、空中での生活は続きました。ウェストコーストに飛んで、飛行機の製造を監督したのですが、夫はそれに乗って航空路の探査を行う計画でした。私達は試験飛行を行い、私は一日の教習でグライダーの免許を取りました。新しい飛行機に乗って、子供が生まれる2ヶ月前に、アメリカを東に向けて横断飛行し、私達は大陸横断のスピード記録を更新しました。

40年を振り返っての後知恵ですが、ああいった私の功績が賢明なことだったとは思っておりません。もちろん、結婚している実感がなかったのですから、私に子供が出来るのだということも、ほとんど信じられませんでした。開放座席の飛行機で、あんなふうに各地を飛び回り、身重な私が乗りこんだグライダーで滑空し、当時としては高度な上空を飛行機で（酸素ボンベもなしで）飛び、大陸横断のスピード記録を出したとは、今考えると、神の摂理を試したことになりましょう。しかし、その時の私は若く、自分が強くて不死身であるように思っていたのです。

これらの冒険に関して、私が実家に書いた手紙は、正確なものではありませんでした。その内容は、実家の母や夫の母の不安を和らげるため

に、手加減してありました。義母は自分の息子の功績を、当然のことと思いつつも絶えず心配しているのが、私にはわかりました。

たった一人で乗ったグライダーが、山から滑空する時は、死ぬほど怖かったのですが、その恐怖を私の夫には打ち明けられませんでした。しかし、いったん飛んでしまっただけの恍惚感に満ちた経験は、決して忘れられず、後悔したことはありません。

それに比べて、西海岸から東に向かう大陸横断飛行には、疲れ切ってしまいました。あの14時間の飛行の最後の4時間というもの、私は乗り物酔いに苦しみました。(私は飛行中に酔ったことがなかったので、ガソリンの臭いと、私のその時の“体調”のせいだったにちがいません。)記録を作る目的の飛行を中断したり、ぶち壊しにしたりするわけにはゆきませんでしたし、それに私が不安がっていることや気分のすぐれないことが新聞の記事になり、そのために〈航空界の発展〉にマイナスの影響を与えなくありませんでした。私は夫にならって、航空界の発展を大きな目標としていたのですから……。

母親になってからの最初の何ヶ月間は、全く普通の楽しい幸せな生活でしたし、家にいて、子供の世話以外のことは一切しなくても満足していた“本当の生活”でした。

しかし、私達をさらなる冒険に誘う、あの数々の探査飛行が待っていたのです。私は、一搭乗員として誇りをもって旅立ちました。飛行中の美と神秘には決して飽きることがなく、無線通信士としての自分の仕事に没頭していました。私がさらに充実感をおぼえたのは、カナダ、アラスカ、シベリアを横断しながら、私達が東洋に飛ぶ途中出会った、辺境の地に住む人々とコミュニケーションを持てたことです。(また、コミュニケーションですけれど!)日本訪問では、その文化の魅力の虜となり、

短時間のうちに見た中国には畏敬の念を抱きました。

私は家族に数え切れないほど手紙を書きました。大半は旅行の感想でしたが、実際よりも多少トーンを落としたものでした。私の中の検閲装置が働いていて、自分の書くものを厳しくチェックし続けていたのです。そして、私の家族に対する保護本能が、本当はもっと危険なエピソードを抑えて書くようにしていたのです。これらの手紙の意図は、家族を安心させることにもありましたから、無事に家に帰るまでは、危険なことについては軽く触れるようにしたのです。1931年の探査飛行をもっと詳しく綴ったのが、その1、2年後に私が書いた『東方への空の旅』です。

輝きの時へ

私の人生のいくつかの時期での記録が一樣でないことを釈明すると、最高に興味をそそる出来事に積極的に携わっている時には、手紙や日記を書く時間がありません。その結果、結婚した当初の何年間かの記録にはギャップが生じます。たとえば、探査飛行の前の何ヶ月にもわたり、私が無線通信機の操作を習ったことは、どこにも書いてありませんが、このためには何週間もかけて無線理論やモールス記号の実習の勉強をしたのです。(当時は、実用的な長距離用音声無線機はなかったのです。)

バード復葉機で、夫から私が受けた何時間もの飛行訓練についても、ほとんど書いてありません。当時、もし書いたとしても、私の厳しい教官を満足させようとして、どんなに挑戦意識を燃やし、飛ぶことへの恐怖を覚え、厳しさに怒りを感じたのかを、認めようとはしなかったと思います。あの飛行機でフィールドの回りをグルグル旋回して、ひどくガタガタした着陸を何回も繰り返したことは憶えています。私自身は、それがどんなにひどいものでも、飛行機が着地するたびに、生きて着陸出来てたいへんホッとしていましたが、夫は、私がきちんとした着陸をす

るまでは、「もう一度飛ぶように」と言い張るのです。そして、あの猛烈な努力の後、飛行場であるロングアイランド・アヴィエーション・カントリークラブから、私の初単独飛行をし、ニューヨーク市の摩天楼の上を、ティタボロ飛行場まで飛んだ時の純粋な喜びは言葉では表わせません。これで、私の少女時代の夢が、ついにかなったのですから。

最後に、1931年の後半の何ヶ月間に受取った手紙を読み返す際に、私が慌しく読んでいることがわかります（それとも、生活それ自体が慌しかったのでしょうか？）。手紙の内容は、現実のことではないかのように思えます。それは、私の人生を見つめる時に、表面上はサテンのように穏やかな流れなのに、滝が悲劇の中へと急な崖を真逆さまに落下して行くのを、見つめていたかのようです。

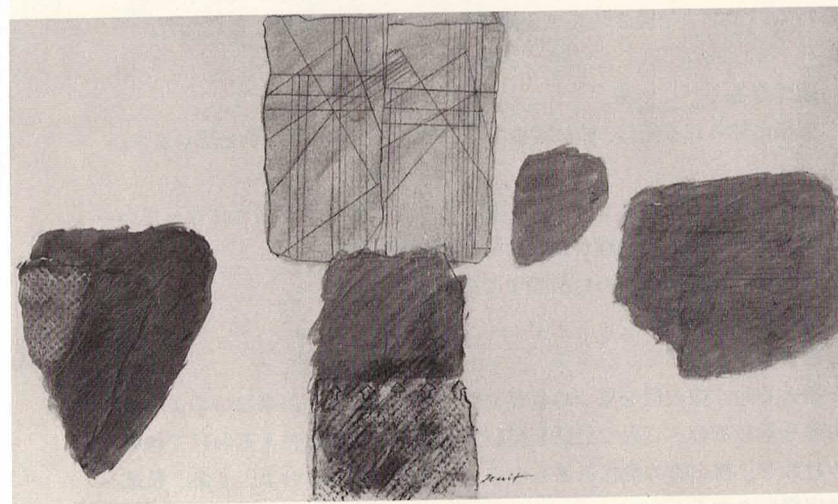
不思議なことに、あの夏の終りに書いた手紙の中で一番生き生きとして際立っている手紙は、父の死後に書いたものです。私が父の訃報に接したのは、漢口から上海に向かう、英国航空母艦ヘルメス号の船上でした。訃報への返事を書く時に、私は心の底からの気持ちの丈を書いたのです。深い悲しみが、内なる検閲の手から私を解き放ったのです。

慎重であることやプライバシーを守ることよりも、もっと重要な価値あるものが他にあるということに、私は気づき始めていました。翌年の春に、悲劇の深淵の中に落ちて初めて悟ったのですが、私はもっと深い生命力の〈源泉〉に帰ることが必要だったのです。私は正直に書くべきでした。ですから、もしかすると、あの悲しみもまた、私を自由にするための一役を果たしたと言えるのかもしれませんが。しかし、この悲しみについては、後の章に譲りましょう。

この本の前半とこの序章は、金色に輝く、輝きの時を語るものです。

1929年

23歳



佐野 めい

スペースの予告

油彩・板 25.5×47.0cm